たのしむ美術館

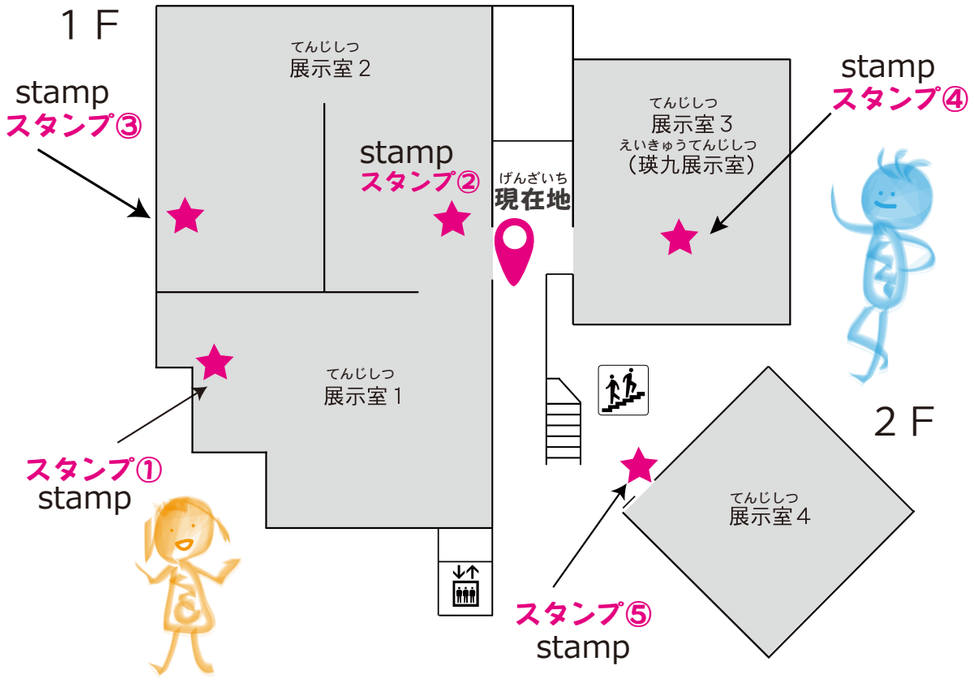
2025 7/13▸10/7

スタンプラリー

実施中

各展示室で鑑賞しながらスタンプを集めましょう。
全てのスタンプを集めた方には、
展示室入口にてオリジナルシールをプレゼントします。ぜひご参加ください！

Take part in a stamp rally while enjoying the exhibits.



たのしむ美術館

展示リスト
会期：7／13（日）～10／7（火）

宮崎県立美術館 MIYAZAKI PREFECTURAL ART MUSEUM

No.	作家名	作品名	制作年	大きさ	技法
名画と出会う					
1	山元　春挙	清流釣魚図	1929（昭和4）頃	139.4×50.9	日本画
2	川西　英	水芸	制作年不明	33.4×24.8	版画
3	棟方　志功	華厳譜　風神の柵	1937（昭和12）	30.4×39.5	版画
4	平塚　運一	甲州西ノ湖富士	1992（平成4）	21.0×38.0	版画
5	泉　茂	樹群	1950（昭和25）	72.5×99.5	油絵
6	坂本　善三	連	1973（昭和48）	185.0×155.0	油絵
7	菅井　汲	VARIATION-A	1977（昭和52）	52.0×52.0	版画
8	両角　修	No.66	1976（昭和51）	38.0×66.9	版画
9	吉田　穂高	町角の神話	1976（昭和51）	46.7×34.9	版画
10	靉嘔	“Rainbow passes slowly” Rainbow night 8	1971（昭和46）	50.0×71.7	版画
11	長谷川　潔	サン＝ポール＝ド＝ヴァンスの風景	1936（昭和11）	22.0×29.0	版画
12	ポール・デルヴォー	途上での死	1978-79	37.2×29.8	版画
13	ポール・デルヴォー	出現	1978-79	37.2×29.8	版画
14	須田　国太郎	青島遠望	1950（昭和25）	45.7×53.1	油絵
15	ピエール・ボナール	葡萄を持つ女	1911-12	73.7×61.6	油絵
16	鴨居　玲	教会	1976（昭和51）	92.8×73.2	油絵
17	ルネ・マグリット	現実の感覚	1963	172.5×116.0	油絵
18	上村　次敏	篭（1）	1991（平成3）	72.7×53.0	テンペラ
宮崎のびじゅつ					
19	制作者不明	染付唐子文瓶	18-19世紀	30.5×20.3	陶磁器
20	黒木　郁朝	ふし木（5）	1983（昭和58）	18.1×15.2	版画
21	黒木　郁朝	穀雨（たねまき）	1983（昭和58）	48.0×67.9	版画
22	はしぐち　みよこ	レッツゴー	1982（昭和57）	130.4×162.0	油絵
23	小池　鐵太郎	眠り	1949（昭和24）	61.0×72.9	油絵
24	塩月　桃甫	佐土原人形	1946-54（昭和21-29）	49.8×23.6	水彩画
25	塩月　桃甫	猫 2	1946（昭和21）	22.3×27.2	油絵
26	岡峯　龍也	ねこ	制作年不明	20.3×28.7	素描
27	山内　多門	乙丑新春之図	1925（大正14）	136.8×33.6	日本画
28	佐藤　小皐	小犬の図	1913（大正2）	85.6×35.6	日本画
※	根井　南華	「明治婦女百態図」下絵	1909（明治42）年頃	－	日本画
29	制作者不明	黒釉貼付龍文甕	17-19世紀	33.2×36.8	陶磁器
30	制作者不明	蛇蝎釉環付壺	19-20世紀	37.6×30.4	陶磁器
31	松山　祐利	色絵飾箱	1944（昭和19）	9.3×16.5×8.5	陶磁器
32	制作者不明	鉄釉着彩急須・茶碗	19-20世紀	急須9.6×13.4 湯呑4.0～4.7×6.3～6.6	陶磁器
33	益田　玉城	元禄美人	制作年不明	135.0×49.2	日本画
34	塩月　桃甫	台湾の娘	制作年不明	47.3×35.2	パステル画
35	加藤　正	三人の旅人	1957（昭和32）	40.9×27.4	版画
36	道北　昭介	作品	1993（平成5）	54.7×75.3	パステル画
37	時田　良太郎	ミクロソーム	1975（昭和50）	66.0×50.9	版画

No.	作家名	作品名	制作年	大きさ	技法
38	時田　良太郎	アンタイトル	1975(昭和50)	55.7×55.7	版画
39	山内　多門	鷹図	1921(大正10)	131.5×18.3	日本画
40	山内　多門	障子腰板絵(その2)	制作年不明	31.5×365.2	日本画
41	伊達　孝太郎	インディアン(顔)	1903-09(明治36-42)	61.8×48.1	素描
42	山田　新一	婦人像	制作年不明	27.3×22.1	油絵
彫刻の世界					
43	ジャーコモ・バルラ	ボッチョーニの手の力線	1915	82.3×73.0×25.1	彫刻
44	アルナルド・ポモドーロ	球体をもった球体	1963	100.0×100.0×100.0	彫刻
45	アルナルド・ポモドーロ	土地区分に関する手紙	1977	34.2×24.4	版画
46	アルナルド・ポモドーロ	横切るイメージ	1977	76.0×56.0	版画
47	マーリオ・ネグリ	ジェネシス―誕生のメトープ	1973	90.5×95.0×58.0	彫刻
瑛九の世界					
48	瑛九	宮崎郊外	1943(昭和18)	72.5×90.8	油絵
49	瑛九	高千穂通りA	1942(昭和17)	33.7×45.5	油絵
50	岡峯　龍也	文華ビル附近	1946(昭和21)	24.0×33.4	油絵
51	加藤　正	敗戦ヒロシマ(赤)血の爆発	1953(昭和28)	60.4×72.6	油絵
52	瑛九	渡り鳥	1957(昭和32)	37.9×23.4	版画
53	瑛九	天女	1953(昭和28)	36.2×26.5	版画
54	瑛九	風が吹きはじめる	1957(昭和32)	39.7×52.8	版画
55	瑛九	眼	1954(昭和29)	72.8×53.0	油絵
56	瑛九	子供とテーブル	1948(昭和23)	33.2×24.2	油絵
57	瑛九	眼が廻る	1955(昭和30)	53.5×65.1	油絵
58	瑛九	紺の中の黒	1958(昭和33)	37.8×45.6	油絵
59	瑛九	黄色のかげ	1959(昭和34)	37.2×44.8	油絵
60	瑛九	まつり	1958(昭和33)	90.8×106.4	油絵
61	瑛九	ブーケ(花束)	1959(昭和34)	162.0×130.3	油絵
62	瑛九	つばさ	1959(昭和34)	259.0×181.8	油絵
63	瑛九	花	1958(昭和33)	35.5×23.4	版画
64	瑛九	小さな赤	1958(昭和33)	32.8×18.4	版画
65	瑛九	点描デッサン	制作年不明	28.0×23.6	水彩画
66	瑛九	題不明	制作年不明	28.0×22.7	フォト・デッサン
67	瑛九	馬	1958(昭和33)	27.1×21.1	フォト・デッサン
68	瑛九	火の見の上で	1954(昭和29)	40.2×27.6	フォト・デッサン
69	瑛九	恋人	1954(昭和29)	16.6×25.2	フォト・デッサン
70	瑛九	森の中	1951(昭和26)	51.3×41.4	フォト・デッサン
71	瑛九	芝居	1951(昭和26)	46.6×56.1	フォト・デッサン
72	瑛九	作品B	1936(昭和11)	28.4×23.0	フォト・デッサン
73	瑛九	空きよなる朝	1936(昭和11)	22.6×27.7	フォト・デッサン
74	瑛九	作品	1936(昭和11)	30.4×25.0	フォト・デッサン
75	瑛九	作品	1936-37(昭和11-12)	27.8×22.4	フォト・デッサン

No.	作家名	作品名	制作年	大きさ	技法
天才ダリのおかしな世界					
76	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.6×16.2	版画(エッチング)
77	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	12.3×20.0	版画(エッチング)
78	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	22.8×17.4	版画(エッチング)
79	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	30.0×18.5	版画(エッチング)
80	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.6×16.3	版画(エッチング)
81	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.4	版画(エッチング)
82	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.9×16.4	版画(エッチング)
83	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	7.4×6.9	版画(エッチング)
84	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	14.3×16.3	版画(エッチング)
85	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.9×16.3	版画(エッチング)
86	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	29.7×18.4	版画(エッチング)
87	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.9×16.5	版画(エッチング)
88	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.6×16.2	版画(エッチング)
89	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.8×16.4	版画(エッチング)
90	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.4	版画(エッチング)
91	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.8×22.5	版画(エッチング)
92	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	7.1×5.7	版画(エッチング)
93	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	5.5×15.3	版画(エッチング)
94	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.8×16.4	版画(エッチング)
95	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	22.2×16.5	版画(エッチング)
96	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.8×16.5	版画(エッチング)
97	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.6×16.2	版画(エッチング)
98	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	7.5×9.7	版画(エッチング)
99	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	10.7×17.8	版画(エッチング)
100	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.8×16.5	版画(エッチング)
101	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.5×16.2	版画(エッチング)
102	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.6×16.3	版画(エッチング)
103	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.2	版画(エッチング)
104	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	9.2×10.0	版画(エッチング)
105	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.3	版画(エッチング)
106	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	29.4×18.2	版画(エッチング)
107	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.6×16.5	版画(エッチング)
108	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	29.8×18.4	版画(エッチング)
109	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	11.2×7.9	版画(エッチング)
110	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.8×16.5	版画(エッチング)
111	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	11.4×17.4	版画(エッチング)
112	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.3	版画(エッチング)
113	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.4	版画(エッチング)
114	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	21.7×16.5	版画(エッチング)
115	サルバドール・ダリ	『マルドロールの歌』	1934	8.2×10.7	版画(エッチング)

道北　昭介 （みちきた　しょうすけ） MICHIKITA Shosuke	昭和5（1930）年、宮崎県児湯郡高鍋町に生まれました。昭和24（1949）年、宮崎大学学芸学部に入学し、昭和26（1951）年2年課程を修了しました。教職のかたわら、県内の作品展に出品、昭和33（1958）年からは新象作家協会展に毎年出品し、昭和38年（1963）会員となりました。この頃画家の福沢一郎と出会い、後に師事します。昭和41（1966）年教職を辞し、家業の旅館を継ぎます。昭和46（1971）年櫟画廊にて東京での初個展を開催しました。昭和55（1980）年新象作家協会を退会し、日本美術連盟会員となります。一貫して、風土を造形化した抽象絵画を追求する一方、短歌誌の表紙、焼酎のラベルのデザインなども手がけました。平成5（1993）年、福岡県にて没。
棟方　志功 （むなかた　しこう） MUNAKATA　Shiko	明治36（1903）年、青森県に生まれました。ゴッホに憧れて画家を志し、大正13（1924）年上京します。川上澄生の版画に影響され、平塚運一に教えを受けて版画制作を始めました。昭和7（1932）年、日本版画協会会員に、昭和10（1935）年、国画会会友となりました。昭和13（1938）年、新文展で版画作品初の特選を受賞、昭和27（1952）年ルガノ国際版画ビエンナーレで日本人初の優秀賞受賞、昭和30（1955）年サンパウロ・ビエンナーレ展で版画部門グランプリ、翌年ヴェネツィア・ビエンナーレで国際版画賞受賞など、国際的な評価を得ました。物語や詩、神仏、女性などを単純な形で表現した、おおらかで力強い作品を木版で制作しました。黒一色で刷り上げた後、裏から彩色して柔らかなイメージに仕上げた作品もあります。昭和50（1975）年東京都で没。
両角　修 （もろずみ　おさむ） MOROZUMI Osamu	昭和23（1948）年、長野県茅野市に生まれました。昭和43（1968）年、多摩美術大学絵画科に入学、吹田文明、小作青史に師事します。卒業制作で木版画の点描を試みたのが、本格的な版画の制作活動のきっかけとなりました。昭和47（1972）年大学を卒業、同年、日本版画協会主催版画展新人賞、日動版画グラン・プリ展グラン・プリを受賞。昭和49（1974）年多摩美術大学大学院修了しました。以後クラコウ国際版画ビエンナーレ、ジャパン・アート・フェスティバルなど、国内外の展覧会で活躍します。昭和61（1986）年から翌年にかけ、文化庁派遣芸術家在外研修員として、ニューヨークに滞在します。画風は、抽象的で立体感を感じさせるものから、単純な線で構成されたものへと変化しています。
山内　多門 （やまうち　たもん） TAMAUCHI　Tamon	明治11（1878）年、宮崎県都城町（現都城市）に生まれました。明治25（1892）年都城尋常高等小学校を卒業後、狩野派の日本画家、中原南溪に入門し日本画の基礎を学びました。明治32（1899）年、21歳のとき上京して川合玉堂の門をたたきます。その年の日本絵画協会第7回絵画共進会で「水鏡の図」が三等賞を受け、翌年には日本画の巨匠橋本雅邦に入門しました。明治36（1903）年雅号を都洲から本名の多門に改め、その後新しい日本画を目指していた日本絵画協会や内国勧業博覧会、文展、帝展等での作品発表や審査活動において、名実共に日本美術のリーダーの一人となりました。誠実な人柄と強い信念の持ち主である多門の制作活動は、清らかで力強い作品を生み出しました。昭和7（1932）年、東京都淀橋区で没。
山田　新一 （やまだ　しんいち） YAMADA　Shinichi	明治32（1899）年、台湾台北市に生まれました。大正6（1917）年旧制県立都城中学校を卒業後、川端画学校に学びました。同校で佐伯祐三と出会います。翌7（1918）年東京美術学校西洋画科入学後も、佐伯との多感な交遊は続きました。大正12（1923）年同校卒業、京城（現在のソウル）第二高校で後進の指導にあたる一方、朝鮮半島での美術展や帝国美術展に出品しました。昭和3（1928）年アマン＝ジャンに師事するためパリに旅立ち、新しい作風を模索します。昭和5（1930）年再び京城に戻り制作活動を展開します。戦後は京都に居住し、昭和25（1950）年、日展で岡田賞を受賞しました。日展参与や光風会名誉会員を務めました。その間度々渡仏し、風景や人物を数多く描き、昭和51（1976）年フランス政府より国家功労騎士十字勲章を授与されました。平成3（1991）年京都市で没。
山元　春挙 （やまもと　しゅんきょ） YAMAMOTO Shunkyo	明治4（1871）年、滋賀県膳所町に生まれました。本名は金右衛門。12歳頃、円山四条派の流れをくむ京都の野村文挙に入門し、春挙と号するようになります。他に雅号は円融斎、一徹居士がありました。その後円山派の森寛斎に師事し、展覧会にも数多く出品しました。明治42（1909）年、第3回文展に出品した「塩原の奥」が政府買い上げになります。京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）で教師をつとめ、明治33（1900）年主宰した画塾同好会（後の早苗会）では、展示会や写生登山を行うなど後進を育てました。大正2（1913）年に青山離宮御座所の杉戸絵を、川合玉堂、竹内栖鳳らと描きます。竹内栖鳳とともに近代京都画壇の主流となりました。昭和7（1932）年宮崎県の依頼で、阿蘇、高千穂、霧島、桜島などを描いています。昭和8（1933）年没。
吉田　穂高 （よしだ　ほだか） YOSHIDA　Hodaka	大正15（1926）年、東京都に生まれました。昭和24（1949）年旧制第一高等学校を卒業します。昭和26（1951）年木版画を始め、翌年日本版画協会会員となります。昭和31（1956）年第1回シェル美術賞展で3等賞を受賞しました。昭和32（1952）年以降5回連続で東京国際版画ビエンナーレ展に出品、昭和47（1972）年第2回ソウル国際版画ビエンナーレで大賞受賞します。昭和52（1977）年第1回日中友好美術家訪中団の一員として中国を訪問、翌年には日本美術家連盟の派遣で東南アジアを訪問しました。昭和58（1983）年国際美術連盟の総会などの諸会議に出席するため、ヨーロッパやアジアの各国を訪問し、国際的な文化の交流にも力を注ぎました。写真製版を版画に導入するなど、新しい表現技法を開拓。父の吉田博、兄の遠志、妻の千鶴子はいずれも版画家。平成7（1995）年に没。

出品作家略歴（50音順）

作家名	略歴
靉嘔 （あいおう） AY-O	昭和6（1931）年、茨城県に生まれました。本名は飯島孝雄（いいじま　たかお）といいます。昭和29（1954）年に東京教育大学芸術学科を卒業しました。在学中の昭和28（1953）年からデモクラート美術家協会に参加し、瑛九の影響を強く受けます。昭和30（1955）年に池田満寿夫らとグループ実在者を結成しました。昭和33年渡米し、以後ニューヨークと日本を行き来します。昭和39（1964）年、ニューヨークを中心としたグループ、フルクサスに参加しました。昭和37（1962）年以来、光のスペクトルである虹色を用いた作品を発表し続け、虹の画家として国際的に活躍しています。またイヴェントや環境芸術なども手がけ、視覚、触覚などの人間の感覚を改めてとらえなおそうとしています。平成2（1990）年に第22回日本芸術大賞を受賞、その他、国内外での受賞が数多くあります。
泉　茂 （いずみ　しげる） IZUMI Shigeru	大正11（1922）年、大阪市に生まれました。昭和14（1939）年に、大阪市立工芸学校卒業後、大阪で百貨店の宣伝部に勤めますが、昭和22（1947）年に退職します。昭和26（1951）年、瑛九らとともにデモクラート美術家協会の結成に参加し、同協会が解散する昭和32（1957）年まで出品を続けました。同年東京国際版画ビエンナーレ展で新人奨励賞を受賞します。昭和34（1959）年からニューヨークに、昭和38（1963）年からはパリに在住し、現地で個展を開催するほか、日本国内の展覧会にも出品しました。昭和43（1968）年帰国し、以後個展を中心に作品を発表します。昭和45（1970）年、大阪芸術大学芸術学科教授に就任しました。銅版画、リトグラフ、油彩画、アクリル画などを手がけ、作風も叙情的、アンフォルメル風、幾何学的と次々に変化しました。平成7（1995）年没。
上村　次敏 （うえむら　つぐとし） UEMURA Tsugutoshi	昭和9（1934）福岡県久留米市に生まれました。中学生の頃は、ヨーロッパの城など建築物の写真を見て描き、宮崎県立宮崎大宮高校に進んでからは、ゴッホの自画像に感銘を受け、自画像ばかりを描いていたといいます。昭和28（1953）年同校を卒業。昭和31（1956）年に上京して美術研究所に通い、翌年武蔵野美術学校に進みました。在学中に第3回シェル美術賞受賞、二紀展にも出品します。卒業後は大手百貨店に就職し、展覧会の企画運営の仕事をしました。昭和42（1967）年から昭和57（1982）年の間は作品の発表はせず、この間に二紀会を退会しています。退職後は、画廊での個展などを中心に精力的に活動しました。平成10（1998）年没。
瑛九 （えいきゅう） EI-KYU	明治44（1911）年、宮崎市に生まれました。本名は杉田秀夫といいます。大正14（1925）年、旧制県立宮崎中学校を中退して上京、日本美術学校に入学し油絵の制作を始めました。この頃から美術評論を執筆するようになります。昭和11（1936）年、フォト・デッサン集「眠りの理由」を瑛九の名前で発表します。昭和12（1937）年、自由美術家協会の創立に参加。昭和26（1951）年、自由と独立の精神で制作することを主張しデモクラート美術家協会を設立します。この年浦和に移り、銅版画と石版画の制作に専念し版画の普及にも努めました。その間も油彩画の制作を続け、作品は点描の抽象へと移行します。昭和35（1960）年、点描の作品による個展を開催しました。同年没。戦後の美術史に前衛美術の先駆者として確かな足跡を残しました。
岡峯　龍也 （おかみね　たつや） OKAMINE　Tatsuya	明治29（1896）年、宮崎県日向市美々津に生まれました。大正10（1921）年、日本歯科医学専門学校を卒業。大正12（1923）年から佐土原町で歯科医院を開業します。昭和3（1928）年、鱸利彦に油絵具を贈ってもらったのがきっかけとなり、絵筆をとるようになりました。昭和10年戦前の宮崎美術協会のアンデパンダン展が県公会堂で開かれ、『泰山木のある風景』を出品した折に、瑛九からゴッホの画集を贈られました。同年、瑛九らと共に「ふるさと社」を結成しました。還暦を迎えた昭和32（1957）年に県立図書館で個展、昭和47（1972）年県総合博物館で回顧展を開催します。歯科医を開業しながら身辺の物やなにげない生活の一隅を好んで題材にし、素朴な画風で表現しました。昭和52（1977）年没。
加藤　正 （かとう　ただし） KATO　Tadashi	大正15（1926）年、宮崎県串間市に生まれました。昭和25（1950）年東京芸術大学絵画科を卒業します。公募展の階級制度、権威性に疑問を抱き、昭和26（1951）年の第3回から第8回まで日本アンデパンダン展に出品。昭和27（1952）年、瑛九らと共に東京でのデモクラート美術家協会創立に参加し、昭和32（1957）年に解散するまで出品。昭和29（1954）年に瑛九、泉茂とエッチング3人展を開催。昭和32（1957）年に東京国際版画ビエンナーレ展に出品します。版画のほか油彩やコラージュ、ビデオなど幅広く制作し、『美術手帖』などに執筆活動を行いました。平成3（1991）年には串間市文化会館の緞帳（どんちょう）をデザインし、また個展を中心に意欲的に制作していました。平成28（2016）年、東京都にて没。
鴨居　玲 （かもい　れい） KAMOI　Rei	昭和3（1928）年、石川県に生まれました。金沢美術工芸専門学校で宮本三郎に師事します。在学中から二紀展に入選し、途中一度退会しましたが、昭和56（1981）年の退会まで二紀会で活躍します。昭和34（1959）年渡仏し、昭和36（1961）年に帰国、翌年シェル美術賞展佳作賞を受賞しました。昭和40（1965）年からブラジル、ボリビア、ペルー、パリを放浪し、昭和41（1966）年にローマより帰国、昭和44（1969）年に昭和会展優秀賞、安井賞を受賞しました。この頃から教会を主題とした絵を描き始めます。昭和46（1971）年からスペインのバルデペーニャスに住み、老人や酔った男などを描き、昭和52（1977）年に帰国しました。昭和53（1978）年には県美展の審査員として宮崎県に来ています。自己を厳しく見つめ絵を追求し続けました。昭和60（1985）年没。
川西　英 （かわにし　ひで） KAWANISHI Hide	明治27（1894）年、兵庫県神戸市に生まれました。県立神戸商業学校在学中に通信教育で油絵を学びました。山本鼎の木版画「ブルターニュの入江」に感動し、木版画を始めますが、父親に反対されます。大正4（1915）年、絵をやめることを条件に個展を開きましたが、個展を見に来た専門家に激励され、画家になる決意をします。大正12（1923）年、第5回日本創作版画協会展に初入選、昭和3（1928）年には第7回国展に初入選しました。昭和6（1931）年、徳力富吉郎の『大衆版画』発行に協力し、同年に「神戸十二ヶ月風景」を発表します。翌年に日本版画協会会員、昭和10（1935）年には国画会会員となります。昭和37（1962）年、神戸新聞平和賞を受賞しました。昭和40（1965）年没。
黒木　郁朝 （くろぎ　いくとも） KUROGI　Ikutomo	昭和19（1944）年、宮崎県延岡市に生まれました。高校時代に日本版画協会主催の版画展に初入選します。昭和38（1963）年、武蔵野美術大学に合格しましたが「絵は先生から習うものではない」と入学せずに帰郷してしまいます。その後、独学で木版画を制作、国展等に出品するようになります。昭和43（1968）年にシルクロードを旅し、その帰路ボルガ地方の工芸品に描かれた絵に感動しました。その後、昭和54（1979）年、イビサ・ビエンナーレに出品します。同年、木版画集『光の紙Ⅰ』を福岡画廊より刊行、昭和55（1980）年には福岡市美術館企画のアジア現代美術展に招待出品します。昭和59（1984）年に木版画集『時の紙』をギャラリー・プチフォルムより出版しました。画廊企画による個展を全国各地で開催するほか、各種国際展に多数出品しています。
小池　鐵太郎 （こいけ　てつたろう） KOIKE　Tetsutaro	明治39（1906）年、東京市（現東京都）に生まれました。昭和4（1929）年、東京美術学校（現東京芸術大学）日本画科を卒業し、県立宮崎中学校の美術教師となりました。昭和15（1940）年に台北に渡り台北第一師範学校に勤務し、昭和19（1944）年に台湾美術展覧会に出品します。昭和21（1946）年に帰国し、翌年鹿児島師範学校（鹿児島大学教育学部の前身）の教授に就任、鹿児島の美術教育の基礎を築きます。昭和22（1947）年、南日本美術展に出品、昭和28（1953）年に新美術協会を創設しました。昭和31（1956）年日展に入選し、翌年には創元会会員となる。昭和46（1971）年、九州幼年美術の会を設立します。昭和51（1976）年、勲三等旭日中綬賞を受賞します。油彩画を中心に桜島や霧島、花などの自然をテーマに制作しました。平成2（1990）年鹿児島県で没。

坂本　善三 （さかもと　ぜんぞう） SAKAMOTO　Zenzo	明治44（1911）年、熊本県に生まれました。昭和9（1934）年に帝国美術学校（現武蔵野美術大学）を中途退学します。昭和10（1935）年から昭和17（1942）年まで兵役についていました。昭和20（1945）年、東京で全作品を戦災で消失し、翌年熊本に帰郷しました。昭和22（1947）年第15回独立展で独立賞を受賞。昭和24（1949）年に会員となります。昭和28（1953）年、熊本市の大水害で戦後の作品の大部分を損失します。昭和32（1957）年に渡欧し建物や壁をモティーフにして制作し、次第に単純化さらに抽象化へと進みました。「グレーの画家」と呼ばれ、代表作に「連帯」「連」などがあります。また、熊本を中心に文化振興に貢献し、昭和51（1976）年と52（1977）年には宮日展の審査員も務めました。昭和62（1987）年没。
佐藤　小皐 （さとう　しょうこう） SATO　Shoko	万延元（1860）年、宮崎県延岡に生まれました。祖父は絵師として内藤藩につかえており、代々画家の家系でした。若い頃は父について画を学びましたが、明治13（1880）年、20歳の時に上京します。渡辺小華や滝和亭に師事し、南画を究（きわ）めました。同郷出身で宮崎において製糸工場を経営していた遠山克太郎の勧めもあり、宮崎に移住します。以後は、亡くなるまで宮崎の地において画業にいそしみました。山水画を得意とし、画風も高く評価されていたらしく「小皐百画頒布会」が計画されたほどでした。昭和3（1928）年死去。
塩月　桃甫 （しおつき　とうほ） SHIOTSUKI　Toho	明治19（1886）年、宮崎県西都市三財に生まれました。本名は善吉といいます。宮崎県師範学校に学び、教職に就きますが、絵画への道を志して東京美術学校へ進み、明治45（1912）年に卒業します。大阪の浪華小学校に勤務、画家の伊原宇三郎に出会います。その後松山市の愛媛県師範学校に勤めながら画業にも励み、大正5（1916）年、第10回文展に「山越しの風」が初入選します。大正10（1921）年台湾に渡り、台湾美術展の創設に尽力、審査員を務めるなど台湾美術界の振興に努めました。昭和21（1946）年宮崎に引き揚げ、宮崎大学講師や県展（後の宮日展）の審査員を務めるなど、本県美術界に大きく貢献しました。昭和27（1952）年宮崎県文化賞を受賞、フォーヴィスム的な鮮烈な色彩や力強い筆づかいで特異な画風を追求しました。昭和29（1954）年没。
菅井　汲 （すがい　くみ） SUGAI　Kumi	大正8（1919）年、神戸市に生まれました。昭和8（1933）年、大阪美術学校に入学しますが、病気のため間もなく中退します。昭和12（1937）年から同20（1945）年まで商業デザインの仕事に従事します。昭和27（1952）年に渡仏、昭和29（1954）年にはパリのクラヴェン画廊で初の個展を開催します。昭和34（1959）年のリュブリアナ国際版画ビエンナーレで大胆な抽象表現が注目され買上賞を受賞しました。以来受賞が続き、国際的に高い評価を得ます。昭和44（1969）年、東京国立近代美術館の壁画制作のため17年ぶりに帰国し、日本での初の個展を開きました。明快な色彩と幾何学的形態の組み合わせによるダイナミックな構成に特徴があります。平成8（1996）年没。
須田　国太郎 （すだ　くにたろう） SUDA　Kunitaro	明治24（1891）年、京都市中京区（現下京区）に生まれました。明治43（1910）年から独学で油絵を始めますが、大正2（1913）年、京都帝国大学に入学し、深田康算のもとで美学・美術史を学びます。大正6（1917）年、関西美術院では都鳥英喜らにデッサンを学びました。大正8（1919）年に渡欧し、スペイン美術とヴェネツィア派を研究しました。大正12（1923）年に帰国し、昭和7（1932）年には帰国後初の個展を開催し、画壇にデビューします。昭和9（1934）年、独立美術協会会員となります。同年、独立美術協会京都研究所で小林和作とともに実技指導にあたりました。昭和14（1940）年以降京都市美術展の審査員を務めました。昭和22（1947）年、日本芸術院会員となります。昭和34（1959）年、毎日美術賞特別賞受賞。昭和36（1961）年没。翌年独立展に須田賞が設けられました。
伊達　孝太郎 （だて　こうたろう） DATE　Kotaro	明治11（1878）年、宮崎県宮崎市高岡町に生まれました。明治30（1897）年、宮崎県尋常師範学校講習科を卒業し、宮崎県と佐賀県で旧制小、中学校の図画教師をつとめました。その頃アメリカの美術雑誌を目にし、急速に洋画にひかれていきます。明治35（1902）年に渡米し、翌年セントルイスの美術学校に入学します。明治40（1907）年、全米から選ばれた特待生として、ニューヨーク美術学校裸体科で2年間学びました。卒業後は肖像画家として活躍し、大正8（1919）年に帰国、東京で肖像画などを描いていました。大正11（1922）年、宮崎県議会議事堂で個展を開催しました。昭和2（1927）年鹿児島に移り、昭和6（1931）年に伊達洋画研究所を設立します。優れたデッサン力で細密な描写を得意としました。昭和39（1964）年没。
サルヴァドール・ダリ Salvador DALI	1904年、スペインに生まれました。1921年から25年までサン・フェルナンド王立美術アカデミーで学びました。在学中にフロイトの「夢判断」を読み、夢の精神分析に啓示を受け、精密な描写で無意識の世界を表現しました。1929年パリで華々しくデビューし、シュルレアリスム後期の代表画家として知られるようになりますが、シュルレアリスムの理論的指導者ブルトンと対立し、1934年運動から除名されます。1930年頃、ガラと結婚します。欧米を経てスペインに定住し、ガラをモデルに聖母を描きました。版画、宝石デザイン、映画等も手がけ、著書も多くあります。1989年、スペインで没。
ポール・デルヴォー Paul　DELVAUX	1897年、ベルギーの裕福な弁護士の家に生まれました。少年時代は、ジュール・ヴェルヌの冒険小説やギリシア神話を読みふけっていました。ベルギー王立美術アカデミーで建築と絵画を学びました。初期の作風は、印象派、後期印象派、表現主義と変転します。1934年にブリュッセルで開かれた展覧会「ミノトール展」で、キリコやマグリットの作品に衝撃を受け、シュルレアリスムに接近するようになります。強調された遠近法の空間に美しい裸の女性たちが歩き回る、白昼夢のような幻想的作風を確立しました。1965年、ベルギー王立美術アカデミーの絵画部長に就任。1972年にフランス文化省からレジヨン・ドヌール2等勲章の芸術文学勲章を授与されました。1994年没。
時田　良太郎 （ときた　りょうたろう） TOKITA　Ryotaro	昭和5（1930）年、大分県に生まれました。宮崎農林専門学校（現宮崎大学農学部）を卒業し上京します。中学校で理科の教師をつとめながら絵画を制作しました。昭和44（1969）年にニューヨークのソーホーに移住し、アート・ステューデント・リーグやブラット・グラフィック・センターで学びました。ニューヨークなどで個展を重ねながら、国際青年美術家展（ニューヨーク）、ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ（イギリス）、サンフランシスコ美術館国際版画展など数多くの国際美術展に出品しました。メカニックな要素の強い構成的な作風の版画と絵画を制作し、「気シリーズ」を展開します。その後、ペンシルベニア州に移住し、物質文明の中で人間の存在を探る「生シリーズ」を制作。和紙を使った抽象画の制作にも取り組みました。平成27（2015）年没。
根井　南華 （ねい　なんか） NEI　Nanka	明治16（1883）年、宮崎県宮崎市佐土原町に旧佐土原藩医飯田洞敬の次男として生まれました。本名幹夫、雅号は梅庵。明治29（1896）年に医師根井助太郎の養子となります。同31（1898）年旧制県立宮崎中学校に進みますが病気のため4年で中退します。その後延岡出身の南画家鈴木月谷に師事し花鳥画や山水画を学びました。並行して宮崎市で表具の技術を学んでいます。明治41（1908）年に上京し、南画家の村上委山に花鳥画を、同じく木村香雨に山水画を学びました。約1年の修業を終え翌年帰郷、表装の仕事のかたわら絵を描き続けました。大正13（1924）年からは宮崎市の南画家佐藤小皐に絵を見てもらいます。絵を描き始めると1日中でも描いており、1か月近く家を空け写生に出かけることもあったといいます。南画の画風を追求し続けました。昭和35（1960）年佐土原町で没。

マーリオ・ネグリ Mario　NEGRI	1916年、イタリア、ヴァルテッリーナ地方のティラーノに生まれました。1935年にミラノの高校を卒業し、大学で2年間建築を学びました。この頃から芸術家や文化人らと知り合うようになります。1940年に軍隊に召集され、1945年終戦により帰国します。翌年から彫刻を独学で制作し始めました。この頃から美術評論も行うようになります。1957年にミラノのミリオーネ画廊で最初の個展を開きました。1958年、第29回ヴェネツィア・ビエンナーレに出品し、受賞しました。1959年、第8回ローマ・クァドリエンナーレに出品。古代彫刻に影響を受け、生命の発生をテーマに制作を続けました。1987年ミラノで死去。
はしぐち　みよこ HASHIGUCHI Miyoko	昭和4（1929）年、鹿児島県国分市に生まれました。幼少時を宮崎県日南市で過ごしました。昭和24（1949）年、宮崎県立第一高等女学校を卒業後、1年間宮崎女子自由学園で学びました。学生の頃から絵を始め、19歳の時に描いた裸体の自画像が県展（後の宮日展）に入選します。昭和33（1958）年二科展に初入選、同45（1970）年に会員になり、昭和63（1988）年に退会しました。モティーフは一貫して母と子で、実生活での親子の関係を形に表そうとしています。その後抽象画に移りますが、絵を描くことに行き詰まり、昭和45（1970）年、単身アフリカに渡り延べ1年7か月生活します。その時のアフリカの子供たちとのふれあいが、再び母子をテーマにするきっかけとなりました。
長谷川　潔 （はせがわ　きよし） HASEGAWA Kiyoshi	明治24（1891）年、横浜に生まれました。麻布中学校を卒業した後、洋画研究所で素描と油彩画を学びます。大正2（1913）年から木版画、銅版画の制作を始め、文学雑誌の表紙や挿絵を手がけました。大正7（1918）年に渡仏、大正11（1922）年からパリに定住します。各種の版画技法を習得し、サロン・ドートンヌやソシエテ・デ・パントル・グラヴュール・アンデパンダンに出品しました。当時忘れ去られていた銅版画技法メゾティントを研究、旧来の点刻下地を交差線下地に代え、創造的表現をもって復活させました。昭和9（1934）年、日本の近代版画とその起源展（日仏両国後援）の開催に尽力、翌年フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を受けます。繊細で明快な刻線、精妙な陰影の階調による銅版画は、研ぎ澄まされた自然観察に基づく清らかな神秘性に満ちています。昭和55（1980）年パリで没。
ジャーコモ・バルラ Giacomo　BALLA	1871年、イタリア、トリノに生まれました。トリノの美術学校で素描を学び、ローマで制作活動に入ります。1900年のパリ旅行で新印象主義に影響を受けました。ローマに戻ってボッチョーニらと知り合い、詩人マリネッティの提唱する未来派の運動に参加します。1910年の「未来派絵画宣言」に署名し、30年代まで同派の中心作家として活躍しました。物体の連続する動きを並べて描く手法を発展させ、パターンや色彩の配列によって運動を視覚化する抽象的な構成へと向かいました。1913年から、運動の軌跡を造形化する抽象的な立体作品を制作するようになります。映画や舞台美術にも関心を持ち、様々な分野で未来派の理想の実現を試みました。1958年没。
平塚　運一 （ひらつか　うんいち） HIRATSUKA　Unichi	明治28（1895）年、島根県松江市に生まれました。大正2（1913）年石井柏亭に師事します。大正4（1915）年から伊上凡骨に版画を学びました。翌年、二科展に版画で入選。大正9（1920）年以降は展覧会に出品しながら雑誌の刊行等も手がけました。大正13（1924）年頃山本鼎主宰の農民美術運動に参加。昭和5（1930）年国画会会員となり、版画部設置に参加するなど、創作版画運動の中心を担いました。昭和10（1935）年から東京美術学校にて、昭和18（1943）年からは北京国立芸術専科学校の木版画講師を務め、後進の育成にも尽力しました。黒一色で刷り上げられる、力強い線と大胆な構成による木版画を特徴としています。平成9（1997）年没。
ピエール・ボナール Pierre　BONNARD	1867年、フランスに生まれました。エコール・デ・ボザールとアカデミー・ジュリアンで修業して、ナビ派の一人として出発しました。アンデパンダン展などに出品し、版画やポスターに優れた作品を残しました。1880年から90年にかけて、ゴーガンに学んだ若い画家たちと共に、新芸術の先駆者を自負してナビ派を結成します。人物画、風景画、静物画などあらゆるジャンルを扱い、色彩豊かな調和と生きる喜びを表現しました。平坦な色面と神秘的で装飾性豊かな色づかいや大胆な画面構成は、フォーヴィスムやキュビスムなどの20世紀絵画に大きな影響を与えました。1947年没。
アルナルド・ポモドーロ Arnaldo POMODORO	1926年、イタリア中部のモルチャーノに生まれました。建築を学んだのち、舞台美術と貴金属細工の仕事を始めました。1954年にミラノに移り、独学で彫刻に取り組みます。抽象のレリーフ作品で注目を集め、1955年のヴェネツィア・ビエンナーレに招待されました。1959年、政府の奨学金を得て渡米。1963年にサンパウロ・ビエンナーレ国際彫刻賞、1964年にはヴェネツィア・ビエンナーレ彫刻賞を受賞します。球、円すい、円柱などの幾何学的形態、磨き抜かれた表面をむしばむ裂け目と、そこに刻まれた記号状の浮き彫りが特徴です。ニューヨークの国連プラザほか、世界各地の公共の場に作品が設置されています。 2025 年没。
ルネ・マグリット Rene　MAGRITTE	1898年ベルギーに生まれました。1916年からブリュッセルの美術学校で学びました。キュビスムや未来派の影響が強い絵を描いていましたが、1922年にデ・キリコの＜愛の歌＞に決定的な影響を受け、1925年頃からシュルレアリスム的な絵を描き始めました。1927年にブリュッセルのル・サントール画廊で初個展を開催します。1930年代には、数々の国際シュルレアリスム展に参加しました。1954年にブリュッセルのパレ・デ・ボザールで大回顧展が開催され、広く名を知られるようになります。身近なものを実際にはありえない場所に置いたり、組み合わせたりして神秘的な世界を表現したシュルレアリスムの代表的な画家です。第二次大戦後のポップ・アートに影響を与えました。1967年ブリュッセルで没。
益田　玉城 （ますだ　ぎょくじょう） MASUDA　Gyokujo	明治14（1881）年、宮崎県都城市に生まれました。本名を珠城（たまき）といいます。幼い頃から絵が好きで、はじめは赤池南鳳に師事しました。明治28（1895）年、絵を志して京都美術工芸学校に入学しましたが、病気のために休学することになります。回復後、東京美術学校に入学し、明治37（1904）年に卒業しました。その後、円山派の川端玉章に師事します。明治38（1905）年には、東京女子美術学校で教壇に立ちます。同42（1909）年、川端玉章が川端画学校を設立する際、幹部として参加し教授となりました。数年後退職して制作に専念します。大正11（1922）年には山内多門とともに中国に写生旅行をしたり、精神的な充足を求めて高僧について禅書を学んだりしています。美人画や山水画を得意としました。昭和30（1955）年没。
松山　祐利 （まつやま　すけとし） MATSUYAMA Suketoshi	大正5（1916）年、宮崎県都城市に生まれました。昭和11（1936）年、旧制都城中学校卒業。昭和19（1944）年帝国美術学校工芸図案科を卒業します。在学中は富本憲吉に師事しました。昭和24（1949）年国立京都陶磁器試験所に入ります。翌年、岐阜県多治見市の陶磁試験場の研究生として美濃の土について学びました。昭和27（1952）年多治見市脇之島に窯（かま）を開きます。昭和30（1955）年美濃焼の土岐市に窯を開き、志野焼や織部焼、黄瀬戸の伝統的技法を生かした現代陶芸の道を歩みます。昭和33（1958）年からスタートした土岐市美術展の審査員を務めるほか、昭和42年に土岐市美術家連盟を結成し、会長を務めました。平成18（2006）年、岐阜県にて没。